

ミステリ読書案内

2023. 4. 24 発行元

第470号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

中・高校生にお薦めの本その23

中学生、高校生にお薦めするミステリ本の紹介の23回目。今回は少し前の作品を選んでみた。手に入りやすい本もあるだろうし、なかなかお目にかからない本もある。図書館等で探してみてもはどうだろうか。

私が中学生の頃に読んでいたのは…

私が中学生の頃に一番熱心に読んでいたのは残念ながらミステリではない。誠文堂新光社から出ていた月刊雑誌『天文ガイド』。今はもう手に取ることもないが、中学生の頃は隅から隅まで繰り返し読んでいた。この雑誌は三分の一くらいが広告でできており、各望遠鏡会社の製品を眺めるのが好きだった。

本文で言うと、天体写真を撮っていたので、読者の写真を第一に眺める。そして、太陽の黒点観測をして

いたので、その月々のデータチェックをし、月面、惑星のトピックスを拾い出していく。望遠鏡の新製品テストレポートなども楽しく読んだ。ただ、専門的な話にはついていけないものもあり、大人になったら学者になって理解できるようになると思ったものだ。

中学生の頃は理科関係の本を読むことが多かった。動物でも植物でも、岩石・鉱物にしても『図鑑』を眺めるのは好きだった。今はSNSの画面上で調べる方が便利なのだと思うけれども…。

加納朋子『月曜日の水玉模様』

1998年集英社。『小説すばる』に連載された後まとめられた短編集。曜日ごとの題名で連作7編が書かれた。主人公は小田急線で通うOLの片桐陶子。電車の中で毎日見かける居眠り男・リサーチ会社の調査員・萩広海と繰り広げる日常の謎を中心にした物語。

第一話が表題作で、二人の電車の中で最初の出会いから、ビル荒らしの噂話、そして金庫の扉に貼られた「触るな危険。爆発するぞ」の謎まで。萩の月曜日用のネクタイは黄色の地に黒い水玉模様がついている。あまりに目立つのでビル荒らしの犯人として疑われたりして…。でも本人は飄々として謎に取り組み、あっさり解明してみせるのだった。

柄刀一『幽霊船が消えるまで』

2002年祥伝社ノンノベルス。『天才・龍之介がゆく！』シリーズの中の一冊で『殺意は砂糖の右側に』に続く第二作。『小説NON』に連載したものを中心に6編を収録。探偵役は知能指数190だけれども生活能力はゼロに近い天地龍之介。物語の案内役はその従兄弟に当たる光章というコンビ。

今回二人は貨物船に乗り込んで旅をすることに。幽霊の怪談話で脅されれば夜、光章は幽霊船と衝突しそうな光景に目にして気を失ってしまう。気が付くと、そんな出来事は起こっておらず、代わりに一緒に乗っていた小日向夫人のエメラルドのネックレスが消えていた。犯人として疑われたのは龍之介…。

里見蘭『古書カフェすみれ屋と本のノリエ』

2016年だいわ文庫。『古書カフェすみれ屋』シリーズの一作目。三作目の『ランチ部事件』は以前紹介した。カフェのオーナーは玉川すみれ。その店の古書コーナーにいるのが紙野頁ようという名探偵。美味しい料理と本の組み合わせの物語。

巻頭の『恋人たちの贈りもの』はプレゼントに悩む男女の話。それぞれが別々に来店してすみれに悩み事を話す。長年付き合ってきていながら、最後の一步が踏み出せない二人。三年前の約束を守りたいと男性は考え、紙野君の薦める雑誌を見てある決心をする。その後来店した女性に紙野君は『O・ヘンリー短編集』を薦める。さて、結末は…。

大崎梢『配達あかずきん』

2006年東京創元社ミステリ・フロンティア。この『ミステリ読書案内』第35号でも取り上げた『成風堂書店事件メモ』シリーズの一冊目に当たる。駅ビル内の書店・成風堂のしっかり者の店員・杏子とひらめきに優れたアルバイト店員・多絵の二人が活躍する。5編収録の短編集。大崎梢は元書店員で、その経験が随所に出ている。

巻頭の『パンダは囁く』は店頭での客からの問い合わせでスタートする。書名も著者名も曖昧な客。「十三」と聞いて『ゴルゴ13』はまだ簡単な方かな。病床の老人からのリクエストを伝え聞いて訪れた客。「パンダ」で思いつく出版社は？ 2005年頃の話だしねえ。そして「あのじゅうさに一ち、いいよさんわん、ああさぶろうに」という三冊の本。これは暗号解読だ。結末を聞いてみると「なあーんだ」と思うようなことでも謎として考えると難問だ。以下、『標野にて、君が袖振る』『配達あかずきん』『六冊目のメッセージ』『ディスプレイ・リプレイ』と続いていく。本好きには楽しめる話。